

集

俳句フォーラム

2019年10月 第73号



ビルの牧

平野無石

ムスリムと参る弁天若楓
初夏や古代微笑の如来仏
水光る半蔵門や花は葉に
大手町牧場ビルの灯涼し
梅雨晴間中に山羊飼う江戸のビル

大手町牧場

都築繁子

ふくろろを繁々見入る夏のビル
毛を刈られアルパカの声涼やかに
薔薇のアーチ覗けば高層ビルの群
若葉風弁天堂の朱の御堂
大日如来像拝す安らぎ館薄暑

プチケーキ

植木やす子

ベンチの背に名入りプレート花の散る
涅槃図の石の彫刻祈り満つ
冷房の館で句会プチケーキ
手入れ良き薔薇の庭なり憩う午後
梅雨晴間矢印に沿い出口まで

大手町牧場

田中藤穂

梅雨冷やビル牧場にフラミンゴ
ビルに牧場アルパカ・小山羊・紅い薔薇
餌につどう山羊の口々春キャベツ
梟は人間観察梅雨晴間
屋上庭園あぢぎみ揺らす風のあり

苔の花

工藤はる子

志果たしたかと問ふ苔の花
蓮開く音の聞こえて夢さむる
しゃつきりと胡瓜の香り皿に盛る
犬走る十葉のほひけちらして
山滴る捨てたし今日のわだかまり

薔薇

篠田純子

ガンダーラ仏胡坐跏におはしけり
ばら祭り巨大な赤き薔薇オブジェ
薔薇の香や旧宮邸にジャズながれ
花屑のしがらむ神田川源流
きよつきよきよと鳴きあふ春のかいつぶり

にらめっこ

大山夏子

幹の鬱黒々と在り飛花落花
金文字の一切経や街薄暑
半蔵門青葉若葉のやわらかく
色と香の溢るる薔薇の旧宮邸
梅雨晴間アルパカの目とにらめっこ





ベンガル湾

渡辺節子

流木の漂ようベンガル湾おぼろ
吾子包むサリーそよがす若葉風
卒業日机の節をそつと撫で
更紗木瓜紅さしてなおはかなげに
落の葉に雨落つる音母の笑み

列

大山夏子

黄ばむ和紙書を始めんと遅桜
明け易し旅の枕の定まらず
見据えらる孔子の眼楷青葉
雨上がり燕とくぐる寺の門
蟻の列追う子しゃがんで「どこ行くの」

赤鳥居

中川のぼる

道遠し生^{しやうじ}死流転の走馬灯
風揺らす紙垂の神話や春惜しむ
山寺の加^{けぎやう}行石段梅雨に入る
夕立や千の列なす赤鳥居
神算のはやぶさ二^ツ号^一や夏銀河

青ほおずき

江口九星

青ほおずき仏の世界の闇深く
梅雨晴れ間列なす人の世蟻もまた
いかなごの釘煮届いて故郷明石
さくら葉に何事もなく喜寿向う
流暢な幼児の言葉いちご狩り

流水文

伊藤昌枝

甘茶仏清らに濡れて子らの唄
植木市生氣さまざまみなぎりて
羅の流水文を縫いあげる
首都高の車列のろのろ梅雨晴れ間
神秘なる五色の繭の命かな

享保雛

楠本和弘

房総の入日連れ来しあらせいとう
享保雛妻は今でもさん付けで
海鳴りを蔵して弾む紙風船
花の下煙管に憩ふ若き車夫
バンジーの少女のジャンプ夏燕

梅雨晴れ間

吉宇田麻衣

嬉嬉として鳥鳴く声や梅雨晴れ間
夏の空痛みのもとを突き止めて
容易には春筍の掘れぬもの
里山の川鯉泳ぎ長閑かな
エレベーターひらり舞い込む落花かな

標

渡部恭子

夕闇に桜一花を標とし
みどり子の寝返り初むる春キャベツ
冷奴流儀それぞれことなりて
鷺草の群舞わたしも浮遊して
泣き言を洗い流して梅雨晴間

紙ひこうき

小沢えみ子

風光り紙ひこうきの宙返り
高僧の法話ときどき夏鶯
風薫る健康体操自己流で
新茶酌む母また小さくなりけり
五月雨や宅配便の不在票

長蛇の列

酒井たかお

花萼のゆれる廃屋時止めて
媼に問う芹摘むという山裾で
水底の影とデュエット蝌蚪泳ぐ
傘傾げ隠蔽色の花石榴
夏帽子長蛇の列の最後尾



円の会

記憶片々

山田邦彦

太陽に真向かう道や燕来る
枕木にサンバのリズム紋白蝶
蒲公英や紙の飛行機夢のせて
二次会が終わる都会の遠蛙
椎の花憶えていたきこと忘れ

其れだけ

若泉真樹

逡巡の涯に現るるや紋黄蝶
田水張る山玲瓏と暮れ泥む
薔薇咲いてただ其れだけのこと日暮
看過するできない私聖五月
墨磨って亡き友偲ぶ青葉の夜

夏の雲

重原爽美

一張羅百合の花粉に好かれけり
米山を踏んまえ湧きたる夏の雲
過疎の村夏雲白く淋しけれ
悠然と見せびらかすや錦鯉
宝石の価値ある如し錦鯉

窓

大山夏子

令和へと百歳まではと雪柳
憲法記念日今日は亡夫の月参り
もてなさる大きな椀で浅蜷汁
ジャズ流すかつて宮家の薔薇の庭
病室の窓覗き来る夏燕

夏つばめ

石川東兎

五月富士匂友遠方より集う
せせらぎや水清ければ海苧咲く
夏つばめ富士見ゆる窓開け放ち
すみれ咲くと譲りし家の主より
土筆ン坊踏まず摘まず空の青

枇杷の実

日置游魚

快晴に指名手配の夏帽子
ルールからはみ出す快感夏嵐
逢いに行く車窓に五月の裾野かな
天上が賑やか枇杷の実熟れて
経過すず時間の疾し青時雨

若布

仁上博恵

かげろうの中へ溶けゆく親子連れ
春疾風工事現場を軋ませて
神楽坂の夜の顔待つ春灯し
被災地から若布が届く友の筆
晩春の憂鬱舌に楽しまん

五月

小笠原妙子

樟の樹洞千五百年の五月闇
梅雨間近名画の傘の品定め
髪洗ひ母似の顔となりけり
五月蠅追ふ猫一瞬の狩の顔
ロツク魂奥処に秘めむ青嵐

春の鴨

三羽永治

我が影と親しき間合ひ春の鴨
万葉の心辿りて青き踏む
空揚げの虎魚一尾の強面
螢火は地上の星や同胞の
A I のセラピー犬や若葉風

ながらえて

治部少輔

逃げ水を追う後悔追うごとく
梅の実落つ風に心はなかりけり
ながらえて仰ぐ令和の五月晴れ
古希過ぎて悪びれもせず昼寝かな
道の駅一足早い心太

枝垂れ花

中山未奈藻

三島大杜紅き杜鵑花(さつき)は天女かな
ひとり来て群れず嫺やか糸柳
惜しげ無く散る花古都の玉砂利踏む
春宵やドボルザークの世界観
夭折の子の小学校枝垂れ花